すこやか
2021. 9 第181号

発　行：金沢市医師会
責任者：羽柴　厚
金沢市大手町3の21　TEL.263-6721
URL:http://www.kma.jp

慢性副鼻腔炎について

風邪だと思ったら、長く鼻水や鼻詰まりが続き、生活の質（ＱＯＬ）を大きく低下させる「副鼻腔炎」。近年では、喘息に合併して発症する治りにくい新たなタイプの「好酸球性副鼻腔炎」と呼ばれるものも増えてきています。今回は慢性副鼻腔炎を中心に原因、症状や治療法などをお話しします。

副鼻腔炎はなぜおこるのか

鼻の穴（鼻腔）の周囲には、「上顎洞」「篩骨洞」「前頭洞」「蝶形骨洞」という４対の「副鼻腔」と呼ばれる小さな空洞があります。この副鼻腔に炎症がおきているのが副鼻腔炎で、「急性」と「慢性」に分けることができます。

急性副鼻腔炎は、一般的にウイルスや細菌の感染によって炎症がおきるもので、通常、２週間程度で治まります。一方、慢性副鼻腔炎では、こうした炎症が３カ月以上続きます。かつて、薬物療法の効果が低かった時、炎症により副鼻腔内にたまった膿が鼻腔に排出されにくく、急性副鼻腔炎から慢性副鼻腔炎に転化することが多くありました。このように膿がたまるので、「蓄膿症」とも呼ばれていました。

症状は、鼻汁や鼻詰まりのほか、後鼻漏といって鼻汁がのどに落ちて、たんや咳、および頭痛を引きおこすことがあります。また、鼻の粘膜に「鼻茸」と呼ばれるポリープができ（図１）、嗅覚が鈍くなることもあります。鼻茸は、慢性化した患者さんの、およ

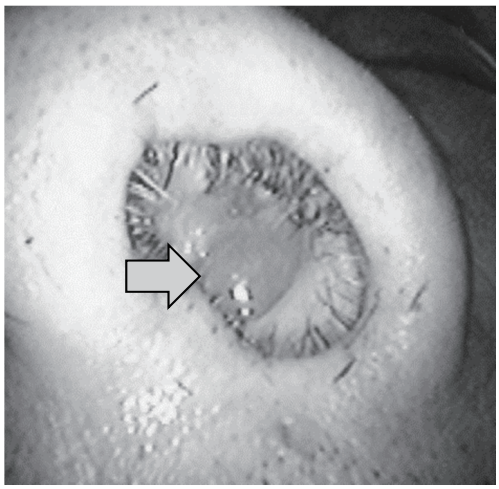


図１　左外鼻孔から見える鼻茸（矢印）

そ半数に見ることができます。重症化すると、顔面の痛みを訴えることもあります。

虫歯やカビが原因のこともある

慢性副鼻腔炎の原因は、先に述べた細菌感染のほか、虫歯が原因のこともあります。とくに上顎部に虫歯があると、隣接する上顎洞に炎症が広がっている場合があります。また、特殊なものとして、「副鼻腔真菌症」と呼ばれる真菌（カビ）による副鼻腔炎もあります。副鼻腔真菌症は、関節リウマチなどの自己免疫疾患の患者さんに多く見られます。

診断では、症状の確認に加え、内視鏡を使って粘膜の腫れ具合やポリープの有無、鼻汁の性質などを確認します。また、必要があれば、コンピューター断層撮影（ＣＴ）検査などの画像検査を行います（図２）。

近年、患者数が増えているアレルギー性鼻炎（花粉症）など、似たような症状を呈する疾患が多くあるのに加え、他の疾患を合併していることもあるので、区別するには注意が必要です。原因を確定するために、鼻の粘膜や鼻汁、血液の検査を行うこともあります。

薬物療法の基本は「マクロライド療法」

治療の基本は薬物療法です。とくに、「マクロライド療法」と呼ばれる「クラリスロマイシン」、「ロキシスロマイシン」といった抗生物質を、少量・長期に渡って使用する治療が大きな効果を発揮しています。

この場合、通常は抗菌薬として使用する量の半分量を、３カ月を目安に免疫調整の役割で内服することになります。アレルギー性鼻炎や鼻中隔弯曲症など、症状に他の原因がある場合は、そちらも同時に治療します。なお、真菌性の場合、抗生物質は効果がありません。

図２　右上顎洞病変（矢印）

薬物療法で症状が改善しない場合、外科療法（内視鏡下鼻副鼻腔手術）を検討します。以前の手術は、歯茎を切開し、頬の骨を削って行われるなど、患者さんの体への負担が大きいものでした。

しかし現在では、手術のほとんどが硬性内視鏡を使って行われます。鼻の穴から硬性内視鏡を挿入し、大きなテレビモニターを見ながら、鼻の奥まで入る特殊な道具を使って、ポリープや病的な粘膜を除去したり、副鼻腔に通じる穴を広げたりすることで、鼻汁や膿を排出しやすくします。最近ではモニターもハイビジョンや４Ｋなどが主流で、大変クリアな画像を見ながら安全に手術することができるようになりました。再発例など難治症例では、ナビゲーションシステムを利用して、手術中に安全な部位を確認しながら操作を進めることもあります。患者さんの体への負担は、以前と比べ非常に小さくなり、安全性も高まってい

ます。

さらに、鼻科手術指導医制度が令和２年度からスタートしました。内視鏡下鼻副鼻腔手術の経験豊富な耳鼻咽喉科医が勤務する医療機関について日本鼻科学会のホームページで公開されております。

「好酸球性副鼻腔炎」にはステロイド療法

2000年以降、急速に患者数を増やしているのが「好酸球性副鼻腔炎」です。これは、白血球の一種である好酸球が、何らかの原因で増加し、副鼻腔に炎症を引きおこしているものです。患者さんは、ほとんどが30代以降です。

発症の初期からにおいが分かりにくくなる嗅覚障害を呈するなど、従来の副鼻腔炎よりも症状が強く、多数のポリープができやすいのも特徴です。また、とくに気管支喘息との関連が多く見られます。難治性の疾患で、厚生労働省の指定難病の一つでもあります。細菌などが原因ではないので、抗菌薬による治療では効果に乏しいです。

もっとも有効なのが、ステロイドを用いた治療です。鼻噴霧用ステロイドや副腎皮質ステロイドの経口投与とともに、とくに気管支喘息を合併したケースでは、アレルギー性鼻炎の治療にも使う「ロイコトリエン拮抗薬」を併用します。漫然とステロイド療法を長期間継続したり、誤って多く服用したりすると重篤な副作用を生ずるため、「好酸球性副鼻腔炎」への対応に十分な経験を持った医師による診療が望ましいです。

薬物療法で効果がなければ手術を行いますが、再発の可能性も高く、術後も生理食塩水による鼻洗浄などを継続します。現在、抗体を用いた薬剤の開発などが進められています。今後、さらに研究が進むことで、体内の特定の病変を狙い撃ちにする分子標的薬を用いた治療法などが行えるようになるかもしれません。

においが分からなくて困ること

嗅覚障害によって、味覚も変わってしまい食べ物がおいしく感じられなくなります。さらに調理の際には味見が難しくなって、家庭の主婦や調理師さんには大問題です。牛乳など賞味期限の短い食品は、腐っても気が付かないで飲んでしまいおなかを壊すかもしれません。また、ガス漏れや焦げたにおいがわからないと、火災の危険が大変大きくなります。嗅覚障害の原因としてもっとも頻度の高いのが、慢性副鼻腔炎です（図３）。幸い慢性副鼻腔炎を治療すれば、嗅覚が改善する例が少なくありませんので、たかが「に

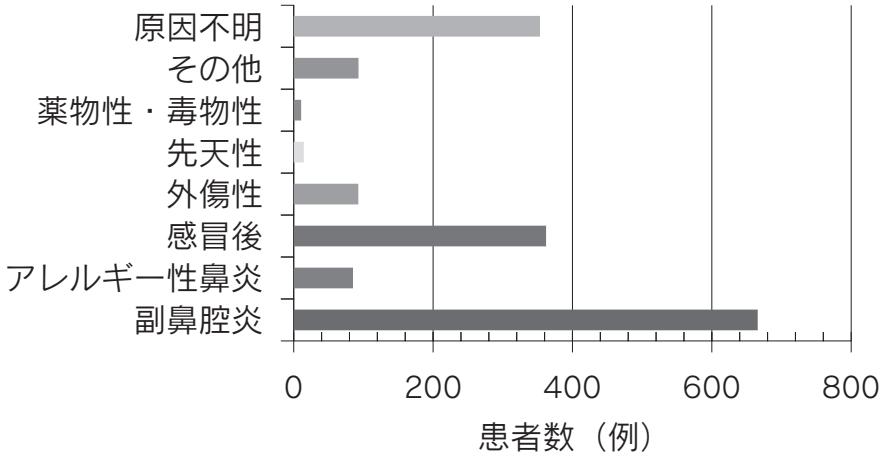


図３　嗅覚障害の原因疾患の内訳
（2009年から2019年：金沢医科大学病院　嗅覚外来）

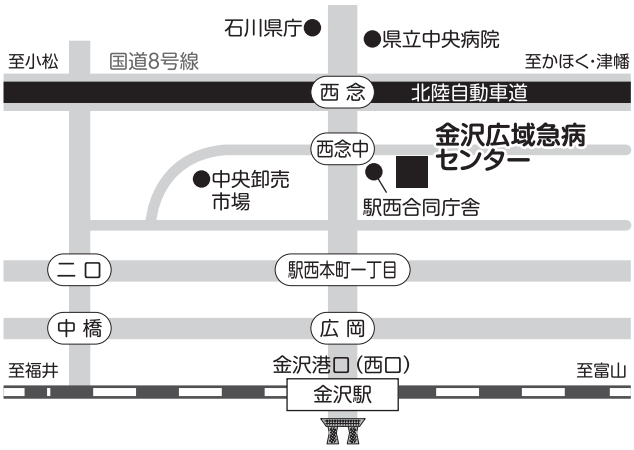
おい」と放置せず、専門の医療機関を受診しましょう。嗅覚障害診療ガイドラインが日本鼻科学会ホームページにおいて無料公開されております。専門医療機関をお探しの際にはご覧ください。

さいごに

鼻詰まりを自覚していても、そのまま放置している方も多いのではないでしょうか。鼻が詰まっていると自然と口呼吸になりがちです。そうすると、のどを経由した感染症のリスクも高くなります。とくに風邪をひいた時、あるいはアレルギー性鼻炎のある人は、きちんと対処することが大切です。

副鼻腔炎が慢性化すると、嗅覚などに影響し、生活の質は思った以上に低下してしまいます。また、治療も長引くことになりかねません。１カ月以上症状が続くようであれば、一度、耳鼻咽喉科専門医の診断を受けてみてください。

◆金沢広域急病センターのご案内◆

診 療 日：毎日（年中無休）
診療時間：19時30分～23時まで
診療科目：小児科・内科
場　　所：金沢市西念３丁目４番25号　駅西福祉健康センター１階
TEL　222－0099

内科、小児科以外の診療科目については、電話にて医療機関を案内します。
※23時以降は電話自動応答案内になります。（午後７時30分～翌朝９時まで）
http://www.kanazawa-kouiki.jp